

青森県高校女子トップチームバスケットボール部員の 内的世界の学年による相違 —風景構成法による分析から—

On the Difference among each grade about the Inner World of Female Basketball Players at the Top-Level High school Team in Aomori Prefecture —Analysis of The Landscape Montage Technique—

本間 正行*・永井 雅彦**・藤田 将弘***・西尾 末広***

Masayuki HONMA*・Masahiko NAGAI**・Masahiro FUJITA***・Suehiro NISIO***

要 旨

青森県高校女子トップチームバスケットボール部員の内的世界が学年によってどのような違いがあるか、風景構成法を手掛かりにして明らかにすることを目的とした。その結果、各アイテムの学年間の出現率に有意な関連は見られなかったが、出現率の傾向から、指導者に対する従順さ、集団種目の一員としての機能性やコミュニケーション、目標が明確、3年生の責任感がみてとれた。

キーワード：青森県高校女子トップチーム、バスケットボール部員、内的世界、風景構成法

I. はじめに

風景構成法（The Landscape Montage Technique, 以下 LMT）は、精神分裂病者への描画を介した治療的接近の可能性、適用性の追求という極めて実践的な見地から、中井によって1969年に創案され、1970年に発表された描画療法の一つである¹⁾。LMTは当初、箱庭療法への適否検討のための予備テストという意味合いがあった。しかし、その後の実施結果により、独自の診断的および治療的価値がある²⁾とされ、治療技法のひとつとして、さらには投影法の一技法として、臨床心理学者や精神科医のさらなる実践・研究などにより、その臨床的価値が広く認められている。また精神科医療現場および心理臨床の現場に限らず、児童相談所や教育相談機関など教育の現場においても、心理テストとしてや治療目的として広く活用されている³⁾。

最近では、描画による心理テストとして施行が簡便であることや内的世界の幅広い情報を得ることができることから、スポーツ領域でも用いられるようになって

きている。鈴木は「変化していく競技者の心理が風景構成法を使うことで一層明らかになった」⁴⁾と述べている。

スポーツ競技者を対象にした LMT の研究には、個人面接相談の一部として使用したもの⁵⁾、スポーツ競技者の描画特性を把握するための基礎的研究⁶⁾、部活不適應者の特性の分析⁷⁾、継時的変化の分析⁸⁾などが報告されている。

ところで学校等でチームを指導していると、学年進行にともない、競技者の内的世界が大きく変化していくように思われる。これまで学年間の相違については大学男女11種目競技の選手を対象に4学年間の比較をした報告がある⁹⁾。しかし高校生を対象とした報告はみられない。

そこで本研究では青森県高校女子トップチームバスケットボール選手の LMT の描画特性が学年によってどのような違いがあるかを明らかにすることを目的とした。

* 弘前大学教育学部保健体育講座
Department of Physical Education, Faculty of Education, Hirosaki University
** 名古屋経済大学
Nagoya Keizai University
*** 日本体育大学
Nippon Sport Science University

方法

1. 対象

2008年青森県高校総体バスケットボール競技で優勝した、S 高等学校女子バスケットボール部員。3年生7人、2年生6人、1年生7人の計20人。

2. 調査期間および場所

2008年11月17日。S 高等学校普通教室。

3. LMT 施行手順

A 4 画用紙 (297×210mm)、黒フェルトペン、16色クレヨンを用いた。

集団法で施行。画用紙はあらかじめ験者が四辺より5mmほど内側に枠を書き入れたものを配布した。「川・山・田・道・家・木・人・花・動物・石」のアイテム順に、フェルトペンで風景を描いてもらった。1つのアイテムごとに全員が描き終わってから次のアイテムを描くように指示した。その後、「何か付け足したいものがあったら描き加えてください。」と述べ、全員が終了後クレヨンで彩色させた。彩色終了後、画用紙の裏に次の8項目の質問(季節、時刻、天気、川の流れの方向・速さ・大きさ、山の高さ・大きさ、人の性別・年齢・何をしているか、動物の種類、石の大きさ)について画用紙の裏に記入させた。

所要時間は約60分であった。

4. 統計処理

収集した絵の「川」、「護岸表現」、「山」、「道」、「人物」、「家」、「木」、「石」について分類、クロス集計し、 χ^2 検定を行なった。統計解析にはSPSS for Windows 16.0 J/12.0J を使用した。

結果と考察

1. 「川」

「川」はしばしば「無意識」の流れに譬えられる¹⁰⁾。その表現形態から、他のアイテムとの関連や構成上から風景として違和感の無いものを「普通の川」、空から川が始まっているものを「天に抜ける川」、画用紙の下枠が川の下縁になっているものを「ひ岸なしの川」、前記3形態以外のものを「その他」と分類した。空から川が始まっている「天に抜ける川」は無意識の出所が不透明であり、自分の言動や思いがなぜそうになってしまうかが把握できない状況にあるといわれている。「ひ岸なしの川」はこちら側が見えていない、すなわち現実が見えていないと捉えられている。

学年別「川の形態」の出現率を表1に示した。1年生は「普通の川」が28.6%、「天に抜ける川」が

14.3%、「ひ岸なしの川」が14.3%、「その他」が42.9%であった。2年生は「普通の川」が66.7%、「ひ岸なしの川」が33.3%、「天に抜ける川」、「その他」の描写はなかった。3年生は「普通の川」が42.9%、「ひ岸なしの川」が14.3%、「天に抜ける川」が28.6%、「その他」が14.3%であった。各学年とも「普通の川」の出現率が最も高く、また2年生が1・3年生より高かったが、 χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

学年間で有意な関連がなかったものの、「普通の川」の出現率が全学年で高かった。「普通の川」は他のアイテムとの関連においてバランスがとれていることの証明であり、無意識に踊らされることなく、自分というものをしっかり持っている選手が多いのであろう。

表1 川の形態 学年別出現率 (%)

		天に抜ける川	ひ岸なしの川	普通の川	その他	χ^2
1年生	出現率	14.3	14.3	28.6	42.9	6.720
	(度数)	(1)	(1)	(2)	(3)	
2年生	出現率	0.0	33.3	66.7	0.0	
	(度数)	(0)	(1)	(3)	(1)	
3年生	出現率	28.6	14.3	42.9	14.3	
	(度数)	(2)	(1)	(3)	(1)	

2. 「護岸表現」

川に「護岸」を描く指示は特にしていないが、「護岸」を描く人もいる。「護岸」の表現をする者は自我境界の脆弱な人に多い、また無意識の氾濫を防ごうとする自我の強さの表れを意味しているかもしれないといわれている¹¹⁾。さらに競技選手には、護岸表現や道による川の挟み込みなど、川に対する何らかのこだわりがあり、種目や性別に関係なく、全日本レベルのプレーヤーに多数みられた¹²⁾と報告されている。以上のことから「護岸表現」についてみる。

学年別「護岸表現」の出現率を表2に示した。1年生は「護岸なし」が57.1%、「護岸あり」が42.9%であった。2年生は「護岸なし」が66.7%、「護岸あり」が33.3%であった。3年生は「護岸なし」が85.7%、「護岸あり」が14.3%であった。「護岸なし」の出現率が学年が上がるにつれて多くなったが、 χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

学年間で有意な関連がなかったものの、「護岸なし」の出現率が全学年で高かった。この結果は全日本レベルのプレーヤーに多数みられたという報告と矛盾するのか、今後検討する必要がある。

表2 護岸表現の有無 学年別出現率 (%)

		なし	あり	χ^2
1年生	出現率 (度数)	57.1 (4)	42.9 (3)	
2年生	出現率 (度数)	66.7 (4)	33.3 (2)	
3年生	出現率 (度数)	85.7 (6)	14.3 (1)	

3. 「道」

「道」は意識の世界を象徴しており、「人生の道」として明確に意識されるものを表現することがある¹³⁾といわれている。

学年別「道」の出現率を表3に示した。1年生は「一筋の道」が57.1%、「途切れた道」が42.9%、「分岐した道」、「二筋以上の道」は見られなかった。2年生は「一筋の道」が66.7%、「途切れた道」が16.7%、「二筋以上の道」が16.7%であったが、「分岐した道」の描写はなかった。3年生は「一筋の道」が28.6%、「分岐した道」が28.6%、「途切れた道」が28.6%、「二筋以上の道」が14.3%であった。「一筋の道」が2年生、1年生に多いが、3年生はいろいろな状態の表現に分散した。しかし χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

有意な関連はないものの、出現率の状態から、1、2年生には自分の進むべき道、部活動を頑張ることに迷いは少ないように思われるが、3年生は高校生生活が残り少ないことから部活動ばかりでなく将来に対する不安が生じているためにこのような結果になったものと思われる。

表3 「道」 学年別出現率 (%)

		一筋の道	分岐した道	途切れた道	二筋以上の道	χ^2
1年生	出現率 (度数)	57.1 (4)	0.0 (0)	42.9 (3)	0.0 (0)	
2年生	出現率 (度数)	66.7 (4)	0.0 (0)	16.7 (1)	16.7 (1)	
3年生	出現率 (度数)	28.6 (2)	28.6 (2)	28.6 (2)	14.3 (1)	

4. 「川と道の関係」

「川」は無意識の世界であることを前記したが、「道」は意識の世界を象徴するといわれている。そこで「川と道の関係」についてみてみる。

学年別「川と道の関係」の出現率を表4に示した。1年生は「川と道が平行」が57.1%、「無関係」が

42.9%であった。2年生は「川と道が平行」が66.7%、「無関係」が33.3%であった。3年生は「川と道が平行」が57.1%、「無関係」が42.9%であった。各学年とも若干、川と道が「無関係」より「川と道が平行」の出現率が高かったが、 χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

「川と道の関係」については「川と道が平行」、「無関係」の他に「直行」という描写があるのだが、本結果では出現しなかった。川と道を直行させたものには、自己開示的な態度や課題状況に対して柔軟に即応していく傾向が窺われた、逆に川に並行する道を描いた人には、自分で物事を判断・決断することに消極的・慎重な態度が窺われた¹⁴⁾と報告されている。女子高校生は練習やゲームにおいて監督やコーチの指示に従順に従う姿をよく見かけるが、本結果はその現れであろうと思われる。

表4 「川と道」の関係 学年別出現率 (%)

		並行	無関係	χ^2
1年生	出現率 (度数)	57.1 (4)	42.9 (3)	
2年生	出現率 (度数)	66.7 (4)	33.3 (2)	
3年生	出現率 (度数)	57.1 (4)	42.9 (3)	

5. 「山の数」

「山」は到達目標であるとか立ちはだかる障害を意味しているといわれている。ゆえに、描く人のおかれた状況と今後の見通しを与えるよすがとなることがあり、乗り越えなければならない問題の数を示唆する¹⁵⁾といわれている。

学年別「山の数」の出現率を表5に示した。1年生は「山が1つ」が42.9%、「山が2つ」が14.3%、「山が3つ」が28.6%、「連山」が14.3%であった。2年生は「山が1つ」が50.0%、「山が2つ」が16.7%、「山が3つ」が33.3%であったが、「連山」の描写はなかった。3年生は「山が1つ」が14.3%、「山が2つ」が42.9%、「山が3つ」が28.6%、「連山」が14.3%であった。 χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

各学年とも山の数3つまでがほとんどで、連山の描写のものは大変少なかった。調査した時期が11月中旬で、12月末の全国大会出場が間近であった。また年度最後の大会でもある。選手たちは目標が定まっておらず、個人の残された課題も少なくなっているのではないかと推察される。

表5 山の数 学年別出現率 (%)

		1つ	2つ	3つ	連山	χ^2
1年生	出現率 (度数)	42.9 (3)	14.3 (1)	28.6 (2)	14.3 (1)	
2年生	出現率 (度数)	50.0 (3)	16.7 (1)	33.3 (2)	0.0 (0)	
3年生	出現率 (度数)	14.3 (2)	42.9 (2)	28.6 (2)	14.3 (1)	

6. 「山頂」

「山」の意味は前記したが、「山頂」が見えない(山頂が画用紙上辺に区切られ画面に描かれていない)ということは、自らが到達すべき目標地点が見えていないことを暗示しうる。

学年別「山頂」の出現率を表6に示した。1年生は「山頂が見える」が100.0%、「山頂が見える山と見えない山がある」が0.0%であった。2年生は「山頂が見える」が100.0%、「山頂が見える山と見えない山がある」が0.0%であった。3年生は「山頂が見える」が85.7%、「山頂が見える山と見えない山がある」が14.3%であった。 χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。全学年のほとんどが「山頂」を描いていることから、「山の数」でも述べたように、選手たちの目標は明確に定まっていると思われる。

表6 「山頂が見える, 見えない」学年別出現率 (%)

		見える	見える, 見えない両方	χ^2
1年生	出現率 (度数)	100.0 (7)	0.0 (0)	
2年生	出現率 (度数)	100.0 (6)	0.0 (0)	
3年生	出現率 (度数)	85.7 (6)	14.3 (1)	

7. 「人物の形態」

「人物の形態」の表現は、記号化とみる「スティックピクチャー」、平面的表現のものを「二次元」、立体的な表現を「三次元」と分類することとした。人物を記号化するという事は、身体を機能的にとらえている、また考え方の中心が、自分から集団へ移行し、チームの一部として自分をとらえるようになっていることを表していると考えられる。

学年別「人物の形態」の出現率を表7に示した。1年生は「スティックピクチャー」が71.4%、「二次元」が28.6%であった。2年生は「スティックピクチャー」が100.0%、「二次元」はなかった。3年生は「スティ

ックピクチャー」が71.4%、「二次元」が28.6%であった。各学年とも「スティックピクチャー」の出現率が高かったが、 χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

各学年とも「スティックピクチャー」の出現率が高かったことは、対象がバスケットボールという集団種目の選手であったことが考えられる。個を際立たせることよりも集団の一機能として自分の存在を認識しているからであると思われる。

表7 「人物の形態」 学年別出現率 (%)

		スティックピクチャー	二次元	χ^2
1年生	出現率 (度数)	71.4 (5)	28.6 (2)	
2年生	出現率 (度数)	100.0 (6)	0.0 (0)	
3年生	出現率 (度数)	71.4 (5)	28.6 (2)	

8. 「家の窓・ドア」

「家の窓・ドア」は自分の心の中(内界)と外界との接触の度合いを表しているといわれている。特にドアは家(内界)に入ることができる機能がある。逆に開閉部がない、または少ないということは、他人への接触への拒否感や自分を閉ざしがちであることの表れであるとみてとれる。

学年別「家の窓・ドア」の出現率を表8に示した。1年生は「窓・ドアあり」が85.7%、「窓・ドアなし」が14.3%、「窓のみ」や「ドアのみ」の描写はなかった。2年生は「窓・ドアあり」が83.3%、「窓のみ」が16.7%、「窓・ドアなし」、「ドアのみ」の描写はなかった。3年生は「窓・ドアあり」が57.1%、「窓のみ」が28.6%、「窓・ドアなし」が14.3%、「ドアのみ」の描写はなかった。1・2年生では「窓・ドアあり」が80%以上出現し、「窓・ドアなし」が0%であったが、3年生では「窓・ドアあり」が57%と少なくなった。しかし χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

有意な関連はなかったものの、大学生競技者を対象とした報告¹⁶⁾と比較すると、「窓・ドアあり」の出現率はかなり高かった。この理由の1つとして考えられることは、大学生のデータは11種目の競技を対象としており、集団種目だけの競技者ではなかったことである。集団種目の競技者は個人が集団(チーム)の一機能としてお互いをよく理解しようとし、自分の周りにバリアを張らないようにしているのではないだろうか。

表8 「家の窓・ドア」 学年別出現率 (%)

		窓・ドアあり	窓のみ	窓・ドアなし	χ^2
1年生	出現率 (度数)	85.7 (6)	14.3 (0)	0.0 (1)	
2年生	出現率 (度数)	83.3 (5)	16.7 (1)	0.0 (0)	
3年生	出現率 (度数)	57.1 (4)	28.6 (2)	14.3 (1)	

9. 「石の大きさ」

「石」はその硬さ、冷たさ、不変性から、深く重い意味を表すといわれている。石は普通の場合、目立たないもの、無数にあるものであって、日ごろはその存在に気づかないことが多い。しかしそれが巨石や岩となると、「障害」や「重荷」、「厳しさ」を表すとされている。

学年別「石の大きさ」の出現率を表9に示した。1年生は「小石」が42.9%、「大きめの石」が42.9%、「岩」が14.3%であった。2年生は「小石」が16.7%、「大きめの石」が50.0%、「岩」が33.3%であった。3年生は「小石」が28.6%、「岩」が71.4%、「大きめの石」はなかった。1年生は「小石」、「大きめの石」、2年生は「大きめの石」、3年生は「岩」の表現が多かったが、 χ^2 検定の結果、有意な関連はなかった。

有意な関連はなかったものの、学年が上がるにつれ「石の大きさ」が大きくなっている。上級生になるほどチーム内での責任やその重さ、厳しさが背中にのしかかってくるものと思われる。

表9 「石の大きさ」 学年別出現率 (%)

		小石	大きめの石	岩	χ^2
1年生	出現率 (度数)	42.9 (3)	42.9 (3)	14.3 (1)	
2年生	出現率 (度数)	16.7 (1)	50.0 (3)	33.3 (2)	
3年生	出現率 (度数)	28.6 (2)	0.0 (0)	71.4 (5)	

まとめ

青森県高校女子トップチームバスケットボール部員の内的世界が学年によってどのような違いがあるか、LMTを手掛かりにして明らかにすることを目的とした。

その結果、

1. 各アイテムの学年間の出現率に有意な関連は見られなかった。
2. 各アイテムの出現率の傾向から、指導者に対する

従順さ、集団種目の一員としての機能性やコミュニケーション、目標が明確、3年生の責任感がみてとれた。

以上のことから、県でトップチームの部員の内的世界には学年間で大きな違いは無く、目標を一つにしてチーム一丸となって活動をしていることが窺われた。ただしこの結果がコーチ陣の指導の影響なのか、あるいは部員たちの力なのか定かではない。近年、競技者の内的世界の分析が取り上げられるようになったとはいえ、まだ資料の蓄積は不十分である。今後レベルの違いや、他種目の競技者との比較から検討を深めていくことが今後の課題である。

引用文献

- 1) 皆藤 章：風景構成法 その基礎と実践，3，誠信書房，1994.
- 2) 同1) ,300.
- 3) 中島登代子：風景構成法による女子競技者の内的世界への接近，日本体育学会第41回大会号A，198,1990.
- 4) 鈴木 壯：競技者の面接事例から一風景構成法を中心に，ヘルメス心理療法研究，5，56-57，1999.
- 5) 鈴木 壯：「やる気がなくなった」と訴えて来談した競技者との面接，臨床心理身体運動学研究第1巻第1号，3-12，1999.
- 6) 大井修太，鈴木 壯：運動選手の風景構成法の描画特性に関する基礎的研究 一非運動選手との比較、及び心理的競技能力の高・低による比較一，臨床心理身体運動学研究第3巻第1号，49-58，2001.
- 7) 中込四郎：競技離脱が「自立」の課題への取り組みとなっていたスポーツ選手の事例，臨床心理身体運動学研究第1巻第1号，37-48，1999.
- 8) 中島登代子，雑古哲夫：風景構成法と競技者心性 一描画表現の継続的变化について一，日本体育学会第42回大会号A，239，1991.
- 9) 本間正行：大学スポーツ競技者における内的世界の学年による相違 一風景構成法の分析から一，日本臨床心理身体運動学会第4回大会号，28-29，2001.
- 10) 山中康裕：「風景構成法」事始め，山中康裕編：中井久夫著作集別巻 H・NAKAI 風景構成法—シンポジウム一，14，岩崎学術出版社，1996.
- 11) 同10)
- 12) 中島登代子：競技選手と風景構成法，同10)，191-192.
- 13) 同10)，24.
- 14) 後藤智子：風景構成法におけるストーリー性の問題，同10)，287-12.
- 15) 同10)，21.
- 16) 同9)

(2013. 1. 7 受理)